

腓脂肪腫の一症例

◎中尾 由佳¹⁾、森 雅美¹⁾、井西 千晶¹⁾、錦 昌吾¹⁾、山田 沙由理¹⁾、蕪木 理子¹⁾
医療法人 宝生会 PL 病院¹⁾

《はじめに》腓組織に発生する脂肪腫は非常に稀とされている。今回、経過観察し得た腓脂肪腫の一症例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

《症例》54 歳、女性。主訴：特になし。既往歴：特になし。人間ドックの超音波検査で肝血管腫、右腎血管筋脂肪腫、脾腫瘍を指摘され、経過観察していたところ 2011 年 5 月の超音波検査にて腓腫瘍を指摘された。血液検査では Hb9.5g/dl と低値であったが、他に異常を認めなかった。

《超音波検査所見》腓頭部に境界は明瞭で輪郭やや不整な腫瘤を認めた。腫瘤は 14x13x10mm で内部は低エコー均一であった。血流シグナルは認めなかった。また尾側腓管の拡張は見られなかった。

《腹部造影 CT 所見》腓頭部に 12mm 大の低吸収腫瘤を認めた。腫瘤は脂肪の density と同様であり、造影される構造は認めなかった。

《腓臓造影 MRI 所見》腓頭部に 12mm 大の脂肪抑制で信号が抑制される腫瘤を認めた。また造影される充実性構造は認めなかった。

以上の画像検査所見より、腓脂肪腫と診断された。その後の経過観察において 2012 年には若干の増大傾向を認めたが、内部構造には全く変化なく、現在に至っている。

《考察》腓脂肪腫は極めて稀な疾患である。腓非上皮性腫瘍の頻度は全腓腫瘍中の 1～2% と少なく、中でも脂肪腫の頻度は極めて少ない。脂肪腫は薄い線維性の被膜を有する成熟した脂肪細胞からなる腫瘍で腓実質とは分離され、内部に隔壁や血管を認めることもある。腓脂肪腫の超音波像は境界明瞭または不明瞭で、輪郭は整～不整でありエコー輝度は低～高エコーと特異的ではないとされている。本例においては、境界明瞭、輪郭やや不整で内部は低エコー均一であった。鑑別として腓癌、腓島細胞腫、悪性リンパ腫などが挙げたが、CT、MRI を含めた総合的な画像検査において腫瘤全体における脂肪の存在を証明することにより診断が可能であった。また脂肪腫と初期の脂肪肉腫との鑑別は困難と思われるが、この場合は経過観察によって腫瘤の大きさや内部構造の変化を観察することが重要であると考えられた。 連絡先：PL 病院 0721-24-3100